



魚鱗癬と私

乃村 俊史

筑波大学医学医療系皮膚科教授

私は魚鱗癬が苦手だった。いや、皮膚科医でも得意な人はほとんどいないので、私も、といったほうが適切だろうか。私は2007年に皮膚科専門医試験を受けたが、直前に魚鱗癬の病型と原因遺伝子を丸暗記したことをいまでも覚えている。とにかく苦痛だった。そんな私がなぜいまでは嬉々として魚鱗癬診療を行っているのか、簡単に紹介したい。

私が真剣に魚鱗癬と向き合うようになったのは、留学から帰国した2010年である。当時、私の出身教室である北海道大学では、秋山真志先生が魚鱗癬の研究を華々しく行っていたが、憧れのスターだった秋山先生は私の帰国とほぼ同時に名古屋大学の教授としてご栄転された。私は大学院時代、秋山先生の(不肖の)弟子として魚鱗癬の研究を行っていたので、自然な形で私に魚鱗癬のバトンが渡された。しかし、私が研究していたのは尋常性魚鱗癬という最軽症の魚鱗癬で、もっと重症な、皮膚科医がイメージするいわゆる”魚鱗癬”とは無縁のものであった。もっと秋山先生から魚鱗癬について習っておけばよかったと心から後悔した。

そして、最初の患者を診察した。全身の皮膚が赤くてガサガサであり、一見して魚鱗癬である。しかし、当時の私は素人であったから、当然、病型がわからない。途方に暮れた。そんな中、当時の大学院生が、その患者に「小さな白い斑」が散在していることに気づいてくれた。よく調べてみると、その部分は病理も正常な皮膚にそっくりで、患者がもっているケラチ

ン1遺伝子変異がその部分の表皮から消失していた。なんと、患者の皮膚の一部から魚鱗癬の原因となる遺伝子異常が消え去っていたのである。遺伝性疾患は治らないと思っていた私にとって、これは衝撃的なできごとだった。結局、この患者はichthyosis with confettiという、自然治癒する皮膚領域が次々に現れてくるタイプの魚鱗癬だった。心から面白いと思った。こんなまれな現象にお目にかかれるのは一生に一度であろうから、目に焼き付けておこうと思い、何度も写真を見直した。しかし、この予想はすぐに裏切られ、自然治癒した皮膚領域をもつ患者が私の目の前に次々に現れた。もはや私にとって、この現象は珍しいものでもなく、自然治癒した皮膚領域を探すことは私の魚鱗癬診療のお作法の1つとなった。

こうして魚鱗癬の魅力にすっかり取り憑かれた私は、2016年に魚鱗癬の専門外来を開設した。そして2017年からは、初夏に福岡で開催される魚鱗癬の患者会に毎年参加し、患者のよき相談相手になれるように努めている。振り返ってみると、私は勉強を始めて5年強で専門外来を開設し、10年経ったいまでは学会などで偉そうに講釈を垂れていることになる。魚鱗癬があれほど苦手だった私が、である。教授となったいま、若手皮膚科医にはぜひ自分の得意分野をもってもらいたいと思っている。それはもしかすると、いま、自分が苦手だと思っている疾患かもしれない。まずは飛び込んでみるのが大切である。若い日の私がそうであったように。